を考察した3論文をあげている。今井昭彦の「幕末における会津藩士の殉難とその埋葬　―会津戦争を事例として―」では，現在もなお，会津人に深く根を下ろしている会津戊辰戦争をとりあげた。国のために戦って死んでいったという点では，同じ意味を持ちながら，敗れたことにより「朝敵・賊軍」として，明治政府から埋葬することも許されず，死者に対して差別をもたせる考え方は，現在の「靖国問題」へと繋がっているとしている。藤井忠俊の「近代日本の軍歌にみる戦争観」では，国民レベルで総動員体制を支えていった戦争イデオロギーの形成について，軍歌の変遷から，その役割について述べている。軍歌にみられる「敵」と「われ」の指し示す意味・兵士としての姿が，徐々に，「われ」の行為の正当化を目的とした理想化へ傾いていき，死への意義付けを重視した内容へと変遷していくことを著した。　菊入三樹夫の「ワンダーフォーゲルから戦時動員体制へ　―20世紀初期の民族意識の特質―」では，20世紀初頭にドイツで始まったワンダーフォーゲルという青年運動を通して，身分的な階級社会を崩壊させ，共通の国民・民族意識で結ばれた社会の形成を目指したとし，一次世界大戦ならびに第二次世界大戦における国家総動員体制を可能にさせていく「民族」というイデオロギーと排他的なナショナリズムの萌芽を求めた。

イギリスの文学理論家であるテリー・イーグルトンの「イデオロギーとは何か」によれば，イデオロギーとは，社会集団が，それと敵対する社会集団の利益に対抗して，みずからの利益を<促進>し<正当化>することであるとし，現実的な利益を「自然化」し普遍化し曖昧めかしたりする戦略を駆使するものであると，いくつかの定義で述べている。本書に掲載された各論文をみると，時代の差こそあれ，戦争イデオロギーとは，自らの正当化を謳い，利害的に敵対する関係を明確にし，思考の選択を奪っていくことで，国民に自発的に発生させられたかのようにみせると定義している。道徳的・倫理的には他人を殺害することなど許されない社会に住みながら，戦争を迎えるとイデオロギーの名のもとに命を賭して戦場に赴き，他人の命を奪いにいく。このパラドクスは，利害関係による「敵」と「味方」の設定をイデオロギーとして浸透させていくことで，例外的な状況を生み出していく。このような状況は，現代においても起こりうるのであろうか。我々は，信念をもってイデオロギーに左右されることなく生活を続けていけるのであろうか。本書では，過去における戦争イデオロギーに関した論文を掲載する事で，本書のタイトルにもなっている「人類にとって戦いとは」という問題をさまざまな「文化装置」を通して，現在における我々の状況も気づかせてくれることになるであろう。本書の最後に掲載される，昨年，鬼籍に入られた佐原真の「「言葉を武器に」の千年紀へ」では，人の殺しの本能は本有的なものでなく，人は理性による攻撃本能の抑止を知る存在であるとしている。そして，最後には次の言葉で締めくくられている。「言葉を武器にかえ，争いを武器・兵器によってでなく，言葉で解決することを，この千年紀の人智は決意し，実施しなければならない。」

（東洋書林2002）

篠原　徹　編

『近代日本の他者像と自画像』

井山裕文※

一，

まずはじめに本書の編者である篠原徹氏はその序論にて，表題である『近代日本の他者像と自画像』を「これは現代に生きる私たちの前世代の人々にとって，日本の外部とは何であり，内部とは何であったのかという問いである。」としている。そしてその問題を「これがただな

※神奈川大学歴史民俗資料学研究科前期課程

らぬ問題を含んでいるのは，現代の私たちが自明だと思っていることが，実は前世代の思索や実践の結果であり，それを私たちが無前提に受容している可能性があるからである」としている。

そもそもこの本は1996（平成８）年から1998（平成10）年にかけておこなわれた文部科学省科学研究費・基礎研究Ａ「国民国家形成過程における日本人の自己認識と他者認識－民俗学と民族学を中心に－」研究をその基としており，当初の参加者は小松和彦，関一敏，岩本通弥，篠原徹であった。

彼らはその会議の中で日本民俗学と民族学（文化人類学）の認識視角の異同を，近代日本人の内と外をめぐる学問認識の一例証として取り上げ，これらのフィールドワークを主体とする「野の学問」が日本国内の地域文化の均質化，海外諸地域のナショナリズムの隆盛と文化変容や科学技術の浸透による地球規模の高度情報化等による研究対象の変貌とそれに見合う学問的視点を再編していくために，過去の学問認識史を相対化していく必要性から次の二柱の研究を構想した。

ひとつは学問創出の過程を追跡することによって「人種」「民族」「国民」「文化」「常民」「民俗」の対象化と近代的再編の歴史的なあとづけを追うこと，いまひとつは国民国家形成と植民地状況との関係を考えることである。これらの具体的な対象として北のアイヌと南の琉球，朝鮮半島と台湾・満州，オセアニアと東南アジアをどのように「自己」あるいは「他者」として認識してきたかを追跡することによって，「日本人」の自己像の歴史を探っていこうとしている。

そして「国家の次元」をその対象と視点に導入することにより，内にあっての地方の創出と国民形成，外にあっての植民地域の創出と国家形成の過程が，それぞれの学問認識とどのような相互関係を結んでいるか，ひいては近代日本の学問史が西欧の学問モデルといかに格闘したかという足跡を辿ることで，再編期にある現代の民俗学・民族学・隣接諸科学の史的限界と今後の可能性を検討しようとしているのである。

こうした経緯が本書の根底を流れるコンセプトとなっており，近代日本が「国民国家」を形成して行く過程で，われわれ日本人は自国の姿をどう捉えて来たのか，またその姿は海外からはどう受け止められてきたか，という基本テーマ，民族・民俗・考古・近代史の各専門家の論文９本を収録した内容となっている。

二，

本書は次のように構成されている。

目次

序論……篠原　徹
第一部　植民地という表象
金関丈夫と『民俗台湾』
——民俗調査と優生政策……小熊　英二
1　日本における当地と調査
2　「良心」の性格
3　優生政策と民俗調査
4　「支配」と「独立」
アイヌ「滅亡」論の諸相と近代日本
……木名瀬　高嗣
1　序
2　「滅亡」論の発生
3　「内面」へのまなざし
——「文字化」される差異
4　「優生」のまなざし
——民族の「血」と「素質」
5　「発展的解消」論
＜土人＞論——「土人」イメージの形成と展開……中村　淳
1　＜土人＞をめぐる状況
2　国語辞典の中の＜土人＞
3　国定教科書の中の＜土人＞
4　『人類学雑誌』の中の＜土人＞
5　なぜいま＜土人＞を取り上げるのか

第二部　国民国家の中と外

陵墓の近代——皇霊と皇室財産の形成を論点に……高木　博志

はじめに

1　皇室財産としての陵墓

2　「御霊が宿る聖域」としての陵墓

むすびにかえて——「仁徳天皇陵」を世界遺産に！

鳥居龍蔵・千島アイヌ・考古学

……宇田川　洋

1　問題の所在

2　自称の問題

3　縄文文化～続縄文文化の時代の遺跡の広がり

4　擦文・オホーツク・トビニタイ文化の時代の遺跡の広がり

5　内耳土器・内耳鉄鍋の広がり

6　クックルケシ・クックルケシ状有孔円板の広がり

7　回転式離頭銛の広がり

8　毒窩形式矢尻の広がり

9　魚鉤の広がり

10　チャシおよび類似遺跡の広がり

11　「千島アイヌ」を考える

南洋に渡った壮士・森小弁

——「南洋群島」以前の日本・ミクロネシア交流史の一断面……小松　和彦

はじめに

1　「南洋」以前——「帝国南門」の成立

2　「南洋」の登場——初期「南洋」表象

3　ミニ商社の興亡——ミクロネシアとの交易・交流の開始

4　森小弁との「出会い」

5　南洋に渡った「壮士」

6　南洋の「王」を夢見る

7　トラック社会への参入——商人として，軍師として

8　心境の変化——トラック人との結婚

9　夢醒めて現実を生きる

10　文化の狭間を生きる——日本帝国の「手先」として

11　ミクロネシア人は，いかに日本を表象したか

第三部　民俗学・民族学の他者

日本における近代人類学の形成と発展

……清水　昭俊

1　序

2　前半期

3　後半期——「文化人類学」期

4　人類学の国際的な類型と日本の人類学

「民族」の認識と日本民俗学の形成

——柳田國男の「自民族」理解の推移

……岩本　通弥

はじめに

1　初期柳田の「民族」認識と「米」の発見

2　確立期柳田の「民族」認識と「一国民俗学」——異同の地方的ではないこと

3　北と南／アイヌと沖縄——列島周縁部への視線

4　戦後における柳田の「民族」認識の変質——「稲の産屋」をめぐって

おわりに

「日本民俗学」から多文化主義民俗学へ

……島村　恭則

1　「日本民俗学」批判

2　多文化状況と民俗学

3　多文化主義民俗学の提唱

4　多文化主義民俗学のフィールドから

あとがき

本書は大きく３部構成からなり，第一部では

「植民地という表象」，第二部では「国民国家の中と外」，第三部では「民俗学・民族学の他者」というそれぞれのテーマにて各論を展開している。

まず第一部では小熊英二が，台湾の植民地問題を雑誌『民俗台湾』とその中心だった人類学者金関丈夫を主軸に，皇民化政策を強化する意思のもと日本が行った民俗学的調査が，現地では植民地支配に抵抗してくれている「良心」と理解され，結果的に漢族のアイデンティティー確立のきっかけになっていった事を指摘する。

次に木名瀬高嗣がアイヌをめぐる「滅亡」の語りの変遷を人類学アカデミズムの見地から概観し，明治期の日本がアイヌ民族を「滅亡」に向かう存在と定義付け，社会的に「保護」すべきものだとしながらも，日本民族への「発展的解消」を示唆する事で，内在する差別意識をそこに隠蔽していく姿を指摘する。

第三に中村淳が現在「差別語」として使用を廃されている＜土人＞という単語を国語辞典や国定教科書，人類学雑誌等からその用法調査をし，そこからアイヌや南方諸民族に対して持っていた日本の意識をあらためて考察することによって，日本の植民地主義の問題を問うものとなっている。

第二部では，まず高木博志が日本の陵墓について，近代における国家神道の成立やそれ以前の陵墓観を，皇室財産としての陵墓の性格と現代における日本の内外からの陵墓公開運動を文化的，学問的な面から世界遺産に登録してはどうかとの提案からはじまる。

次に宇田川洋が人類学者・考古学者である鳥居龍蔵の千島アイヌ研究と現在の調査報告等を基に，各種土器や「チャシ」と呼ばれる遺跡の分布を通じて，北海道アイヌと千島アイヌ，そして環オホーツク諸民族との密接な関わりを豊富な図説を用いて解説している。

最後に小松和彦が日本が南洋諸島を委託統治する前後にかけてミクロネシアのトラック島に渡り，そこで土着した日本人・森小弁とその周囲の姿を媒介として，当時の日本とミクロネシアとの関係，特に「南進論」に基づく官民挙げた南洋進出の過程を浮き彫りにしている。

第三部では，最初に清水昭俊が日本における近代人類学を前半期，後半期に分けてその変遷を紹介している。

まず前半期は明治から第二次大戦までの植民地人類学として人類学の形成期と捉え，坪井正五郎，鳥居龍蔵等を主軸にその草創期から人種学期，民俗学との共同期，そして「民族学」期ともいえる日本民族学会の設立・発展期，最後に戦時体制下における大東亜共栄圏の民族政策に協力する帝国主義の最も色彩の強い民族研究期までとしている。

後半期は戦後から現在までの地球大的な人類学としての発展期を，イギリスの社会人類学，フランスのレヴィ＝ストロースによる構造主義人類学の導入や日本国及び日本経済への利害関係に規制されない海外への研究対象の多様化などを述べている。

次に岩本通弥が日本民俗学の創始者である柳田國男の「自民族」理解の推移を柳田批判の立場ではなく中立的立場で辿っている。それは初期の柳田から戦後の柳田までの「民族」認識が「一国民俗学」というキータームに典型的にあらわれているとしつつも，それを単なる柳田批判という枠ではなく，柳田の学問に対する柔軟性やその“理法”，たとえば方言周圏論においてもあくまで日本語の変化の放送や地域的偏差の条件などを考慮に入れた上での”理法”を究明しようとしたことや，『民間伝承論』の中でも日本国内にも朝鮮や中国，アイヌ等の異文化の流入，つまり種族的な複合を前提をした上で，国全体から見ればだいたいにおいて区別がないため，国を一つの共同体として考えられるとしたなどの単純な「単一民族神話」的なことではないことなどを取り上げている。

ただし，岩本は柳田を賛美しているわけではなく，柳田がいわゆる日本民族を捉える方法として「米」にこだわったことと，それが過ちで

あったことなどを，「むしろ米が常食ではなかったことを明らかにしたのは，その民俗学であった」（本論，「おわりに」より）と記述していることからもわかるように，現在の民俗学の問題を明確化するための論文であることを前提とした良著であるといえる。

そして最後に島村恭則の論文は「「日本民俗学」から多文化主義民俗学へ」として，90年代に入ってから行われた子安宣邦や村井紀，小熊英二ら民俗学外部の思想研究者などからなされた「日本民俗学」批判，つまり「民俗学の有する国民国家イデオロギーやコロニアリズム的側面を批判する」とともに，ポスト国民国家の民俗学として多文化主義民俗学というパラダイムの構想を展開していくことによって，次代の民俗学の再生をはかろうという主張を展開している。

三，

第二次大戦後から続いた冷戦体制の崩壊とともにそれまで制限されていた人や物の流れが関を切ったように世界中へと駆けめぐるようになった。またこうした流れと連動するように，ＩＴ技術及びそのインフラ整備がそれを運用する電算機器のハード・ソフト両面の急激な発達によって，それまでにない大規模でかつ高速な情報の交信が，国境線を越えて展開されている。

この全世界的に広がっていくグローバル化の流れは，もちろん学問分野にも影響しており，民俗学においてもその波は確実に浸透しつつある。それは日本国内のある地域におけるその地域性の考察及びその確立から「全世界的規模におけるグローバリゼーション化における中での個々の地域性の確立」という，多文化状況の世界の中での自らのアイデンティティの模索，そしてその確立へと目指していく時代へとなったのではないかとも思える。

こうした中で本書は日本人とは何かを民族，国家の問題と正面から向き合いつつ，民俗の問題を考える契機を与えてくれる好著といえるのではないだろうか。

これまで，私なりに本書についてその評を行ってきたが，自らの浅学のため充分な読みとりができなかった点が多々あると思う。臥してお許しを請う次第である。

（柏書房　2001）

＜参考文献＞

『近代日本の他者像と自画像』　篠原徹　編　2001年　柏書房

『現代民俗学入門』　佐野賢治・谷口貢・中込睦子・古屋信平　編1996年　吉川弘文館

『日本民俗学概論』　福田アジオ・宮田登　編　1983年　吉川弘文館